

「状況」「状態」「様子」およびその類義語群の意味分析

宮田公治

【キーワード】 状況名詞 状況 状態 様子

1. はじめに

1.1 問題の所在

「状況」「状態」「様子」などの名詞は、どのような意味・機能を帯びて使われるのかがはっきりしない。あってもなくても大きな違いが感じられない場合が多いからである。

(1)a. 美知子さんは《略》「寂しいなんて言ってもらえない状況だった」と述懐する。(週刊朝日 94. 7. 1)

b. 寂しいなんて言ってもらえなかった。

(2)a. 少年はちらりと聴衆の様子を見た。(小林泰三「時計の中のレンズ」)

b. 少年はちらりと聴衆を見た。

さらに、これらの名詞群の相互の違いも明確ではない。

(3) どうですか、新しい職場の{状況/状態/様子/雰囲気/感じ}は？

(4)a. 介護する家族の状況も考慮して(毎日'99. 9. 14 朝、投書の見出し)

b. この先何年続くのかわからないことだけに、先を思うと、ますます介護する人の状態が考慮されなければならないと思うのだが。(同じ投書の本文)

(3)における個々の意味合いの違いはもちろん感じられるが、それを説明するのは必ずしも容易でない。さらに(4)では「状況」と「状態」が同義語扱いされているようである。しかし、常に置き換えがきくわけではない。

そこで国語辞典を引いてみると、「状況」「状態」「様子」にはつぎのような説明がされている²(下線は引用者)。

【情況・状況】その場のありさま。あることの動きとの関連においてながめられた、ある場面のありさま。

¹ 「CD-毎日新聞データ集」(日外アソシエーツ)による。以下同じ。

² 『岩波国語辞典 第6版』(2000年)による。なお、他の辞書の記述も大同小異である。国語辞典以外では森田良行(1984)が「かたち」「すがた」「かっこう」「なり」「ようす」「ありさま」を取り上げているが、「ようす」の項では「特定の場面が呈する雰囲気や情況、感じが「様子」である。」といった記述がみられる。

【状態】事物が、その時にそうなっている、ありさま。特に、外面からでもそれとわかる様子。「仮死—」

【様子・容子】①物事の、見える、または見えたところから察せられる、状態。情勢。「—をうかがう」物事が起こりそうな模様。「夕立が来そうな—だ」そぶり。「困った—もない」人の姿。「—がいい」②特別のわけ。事情。「何か—がありげだ」

「状況」は「ありさま」という名詞で説明されており、「状態」は「ありさま・様子」、「様子(①)」は「状態・情勢・模様・そぶり・姿」で置き換えられている。ちなみに「状況」「状態」の説明に使われる「ありさま」、「様子」の説明で用いられる「模様(②)」の語釈は以下の通りである。

【有様】物事の(ある程度は持続的で)全体的な様子。▽主として、外からも見える場合に使う。

【模様】①(織物・染物・工芸品などに装飾のため施す)図形および色の組合せ。②様子。ありさま。「出発は遅れる—だ」「空の—を見る」「雨—」「—眺めに終始する」(傍観者の対度の場合にも言う)

もちろん、類義語への置き換えは辞書記述に不可欠の手段であるし、単純な「たらい回し」を避けるために修飾語句をつけたりして各語の特徴が表せるように工夫されてもいる。しかし、意味論的な興味からすれば、そもそもこれらの名詞の意味は何なのか、という問いへの明確な答えがほしいところである。

そこで、本稿では「状況」「状態」「様子」およびその類義語群(これらの便宜的な総称として「状況名詞」と呼ぶ)の意味と機能を明らかにすることを目指したい。使用頻度の高い「状況」「状態」「様子」を分析の出発点にすえ、つぎの手順で考察を行う。

- I 「状況」「状態」「様子」はどのように使い分けられているのか。
- II この3語の共通点は何か。(それを敷衍して)状況名詞の共通点は何か。
- III この3語と類似の意味・機能を有する名詞として、他にどんなものがあるか。それらはどのように相互に位置づけられるか。

1.2 〈対象〉と〈認識主体〉

状況名詞と共に同一文中で用いられる名詞句のうち、特に分析に有用な2つを〈対象〉・〈認識主体〉と名付け、意味役割として設定する。なお、状況名詞について、〈対象〉や〈認識主体〉と同列に(構文関係ではなく)意味役割のレベルで言及する際には、〈状況〉と呼ぶ。

1.2.1 〈対象〉

状況名詞はそれ自身だけでは指示対象が決定できず、必ず特定の事物に従属し

て用いられるという特徴がある³。構文的にも、(5)のように「○○の状況」と連体修飾句として限定を受けるか(複合名詞「○○状況」の形もある)、(6)のように「○○は××な状況だ」と主述で対応して用いられる場合がほとんどである。

(5) 事故の状況は、予想以上にひどかった。(谷甲州「獵犬」)

(6) インターネット上の電子商取引は期待されながらもまだ爆発的にヒットしているとは言いがたい状況だ。(毎日 99.5.17 朝)

この○○に相当する、状況名詞が依拠する事物のことを、以下では〈対象〉と呼ぶ。どのようなものが〈対象〉になりうるかという点が、状況名詞を分析する上での1つの切り口となる。

なお、〈対象〉に相当する名詞句が、構文的に明示されていない場合もある。

(7) 状況は八方塞がりだった。それでも、岡野幹夫に無罪の可能性が出てきた以上、このままにしておくことはできなかった。京森は弁護士費用のことを考えないようにした。それを考えだすと知恵をしぼる気力がなえてしまう。(中嶋博行「措置入院」)

(8) ある一つの事実には一定の固有の意味が常に対応している、というのなら、状況はそう困難でないかもしれない。(池上嘉彦「日本語論への招待」)

いずれも〈対象〉は漠然としているが、(7)は「現在の主人公(京森)」の状況、(8)は「前件において仮定された事態」の状況であろう。文脈上自明であるために明示されていないのである。

1.2.2 〈認識主体〉

次の文のワ格名詞は〈状況〉である。そしてガ格名詞はそれを認識・伝達しようとする主体であるが、これを〈認識主体〉と呼ぶ。

(9) 三成はその日、真田昌幸に書状を送り、西軍の状況を知らせた。(津本陽「乾坤の夢」)

(10) 誰もがこの状況を当りまえとしていた。(竹田真砂子「綱子の夏」)

〈対象〉とは異なり、〈認識主体〉は「調べる」「理解する」「伝える」のような認識・伝達に関する動詞が述語となる場合にのみ明示化しうる意味役割である。たとえば名詞述語文である(5)~(8)には、〈状況〉を認識・伝達する主体は構文要素としては存在しない。ただし、(5)にあえて〈認識主体〉を構文要素として取り込めば次のようになるので、名詞述語文の場合、表現主体(話し手・書き手)が〈認識主体〉に相当すると考えたい。

(5') a. 私は「事故の状況は、予想以上にひどかった。」と言う。

³西山祐司(1990)のいう「非飽和名詞句」、すなわち「パラミターの値を設定しないかぎり、ある対象がその属性を満たすかどうかを定めることのできないタイプの名詞句」(p176)に該当する。

b. 私は事故の状況を予想以上にひどかったと言う。

2. 「状況」・「状態」・「様子」

まず「状況」と「状態」を比較し、次にこの2語に「様子」を対置させる。

2.1 「状況」と「状態」

「状況」と「状態」の違いは、どんなものが〈対象〉になりうるかという点に求められる。

“モノ”と“コト”に関して、「空間の中に明確な輪郭によってその周辺空間とは不連続な形で限定された」(池上 2000:p141) “モノ”，「時間の流れの中で自らの周囲とは不連続に限定された」(同:p142) “コト”，とそれぞれ理解するならば、この両者の対立は「状況」と「状態」の違いを説明するのに有効であると考えられる。すなわち、(11)のように〈対象〉が“モノ”である場合は「状態」，(12)のように“コト”である場合は「状況」を使う方がよりふさわしいといえる。

(11) 三上博史のデビュー作となった「草迷宮」は6年ぶりの上映だが、フィルムの状態が悪く今後の上映予定はないという。(毎日 99.5.22 夕)

(12) 警察当局は事故の状況から居眠り運転が原因とみている。(毎日 99.2.16 朝)

しかし、具体物や人なら「状態」、動作や出来事なら「状況」、という具合に一律に決められるほど実態は単純でない。たとえば「人間」や「道路」は先の規定からすれば“モノ”の範疇に入ると思われるが、「状態」だけでなく「状況」の〈対象〉にもなりうる。

(13)a. 総括責任者である谷憲三朗助教授によると、患者の状態は安定しており、アレルギー反応など短期的な副作用はみられない。(毎日 99.2.19 朝)

b. 働く女性の状況は厳しいと言われているが、手に職をつけ、自分で道を切り開く方法もあるんだということを伝えたい。(毎日 99.9.14 朝)

(14)a. 山岳地で道路の状態が悪く、中国人運転手がハンドル操作を誤ったらしい。(毎日 95.7.13 夕)

b. 途中の混雑でキャンプ場到着が遅れたりしないように、途中の道路状況やキャンプ場までのアクセスを確認しておくことも大切。(週刊朝日 94.7.1)

それぞれを較べると、同じ人間や道路でも、「状態」と「状況」では光を当てる側面が異なっていることに気づく。(13a)では体調が、(13b)は人間関係や社会制度が問題になっている。(14a)は路面が未舗装であるとか凍結しているとかいうこ

とを想起させるが、(14b)で重要なのは混んでいるかどうかである。すなわち、つぎのような違いが並行して観察される。

- ・「状態」… “モノ” それ自身の質
- ・「状況」… “モノ” とその周囲にある別の “モノ” が構成する関係

なお、同じ「状況」の用例でも(13b)と(14b)はやや異なる。(13b)では“モノ”としての〈対象〉(＝働く女性)とそれをとりまく“モノ”(もしくは“コト”)との関係であるが、(14b)では〈対象〉(＝道路)自体が“モノ”として把握されているのではなく、道路という“場所”の中に存在する無数の“モノ”(＝自動車)どうしが構成する関係を問題にしている。

「状態」と「状況」の使い分けにあたって重要なのは、〈対象〉が“モノ”か“コト”かという分類ではなく、〈対象〉を一体的な“モノ”と見なすか、〈対象〉をめぐっての「関係」を見出すかという、表現者の捉え方の違いである。2つの捉え方は、時として接近する。(15a)(15b)とも〈対象〉は「(チームの)経営」であるが、先の間人や道路の例と違い、「状況」を使っても「状態」を使っても大きな違いが感じられない。

(15)a. サッカー・Jリーグの川淵三郎チェアマンは17日記者会見し、Jリーグ1部(J1)に参加する16クラブを対象に、経営状態の年度別推移を明らかにした。(毎日99.8.18朝)

b. チームの厳しい経営状況を理解し、年俸の5000万円減をのんだ。(毎日99.11.18朝)

経営が行われるチームを一体的な“モノ”として捉えれば「状態」、チームが置かれた環境、もしくはチーム内でうごめく関係者たちを念頭に置けば「状況」が使われる。このような場合は両者の差が微妙なものになる。それに対して、(11)の「フィルム」からは「関係」を見出しにくいために「状況」は使いにくく、(12)の「事故」は残された遺留品(“モノ”)から全体を思い描くことしかできず、一体的な“モノ”としては把握しがたいので、「状態」にはなじまないのである。

表1にまとめるように、「状態」の〈対象〉となるのはもっぱら“モノ”である。一方、「状況」は〈対象〉が何であれ、そこに「関係」が見出される場合に用いられる。

表1：〈対象〉のタイプと着目する側面からみた「状況」と「状態」の使い分け

名詞	〈対象〉	着目する側面	該当する用例
状態	“モノ”	それ自体の質	11, 13a, 14a, 15a
状況	“モノ”	他のモノとの関係	13b, 15b
	“コト”	その構成要素であるモノどうしの関係	12
	“場所”	中にあるモノどうしの関係	14b, 15b

ただし「状況」の使用範囲は拡大しつつあるようで、「状態」の領域にまで踏み込んでいる例(「路面状況が悪い」など)も時折見られる。

2.2 「状況・状態」と「様子」

状況名詞が現れる典型的な構文環境として、つぎの4つが挙げられる。「状況」「状態」は①～④とも使えるが、「様子」は①②のみで③④では使えない。

①名詞・形容詞述語文の主語または述語として

- (16) 最初は健康食品の販売員である女性たちを中心としたグループができ、「布教活動」を始めたのだが、当時の状況は「イエスの方舟事件」をほうふつさせる感じだった。（「週刊朝日」1994. 7. 1）
- (17) 望月はしばらくの間、ノイローゼ気味になり、勉強も手につかない様子だった。（小池真理子「獣の家」）

②認識・伝達に関する動詞の認識内容として（動作主：〈認識主体〉）

- (18) 三成はその日、真田昌幸に書状を送り、西軍の状況を知らせた。（津本陽「乾坤の夢」）
- (19) いまは大木になったイトスギの木も、モミジの木も、そのときの私の様子を眺めていたことになる。（毎日 99. 12. 15 朝）

③移動・存在動詞とともに比喩的に示される“場所”として（動作主：〈対象〉）

- (20) 長嶺少佐は、危機一髪の状況を何度かくぐりぬけたが、運のほか、危機への判断力と直感の作用も幸いしている。（伊藤桂一「生き残りの大隊長」）
- (21) 小林さんは病院で誤診を受け、劇物を投与され、危険な状態にあった。（毎日 99. 11. 14 朝）

④対象変化動詞の相手・生産物として（動作主：〈対象〉（の構成要素））

- (22) こうした業界は過剰生産設備・過当競争問題を抱え、値上げしにくい状況を、自ら作っている面がある。（毎日 99. 8. 17 朝）
- (23) 自自公の保守路線は、一方ではバラマキ財政出動で、国民が政府に依存する状況を固定化しようとしている。（毎日 99. 9. 12 朝）⁴

「様子」が使える①②の共通点は、「〈対象〉はどのような〈状況〉であるか」という問いが前提になっていることである。①は表現主体が「当時どのような状況であるか」「望月はどのような様子であるか」という潜在的な問いへの答えとして述べており、②は動作主が「西軍はどのような状況であるか」「私はどのような様子であるか」という問いを明らかにするための認識・伝達活動を描いている。「様子」は、このように問いを立て明らかにしようとする主体、すなわち〈認識主体〉が関与する場合にのみ用いられる。

一方、「様子」が使えない③④では〈状況〉の内容はすでに修飾句で特定されており“問い”は潜在しない。〈状況〉は、認識の対象ではなく事態構成に参与する

⁴ 〈対象〉は漠然としているが、あえて言えば「日本の政治」であろう。動作主「自自公の保守路線」はその構成要素。

一要素であり、〈対象〉(の構成要素)と直に対峙するものとして提示されている。

③④で「様子」が使えない⁵のは、「様子」にはつねに〈認識主体〉の視点が込められているためだと考えられる。いわばカメラのファインダーを通して被写体を眺めるようなもので、被写体の人物がファインダーの枠に手を伸ばせないように、〈対象〉やその構成要素が「様子」で表される〈状況〉と直に対峙することはできないのである。これに対して「状況・状態」は、特定個人の視点からは独立した、より中立的・客観的な捉え方だといえる。

こうした違いは、「状況・状態」も「様子」も使えるとした①②からも見出せる。(24)は名詞述語文だが「様子」には置き換えられない。

(24) 今、私は強大な国家権力の前で、いかにしたらそれをぶつつぶすことができるのかと、もがいている状態だ。(高野悦子「二十歳の原点」)

この例の〈対象〉は「私」である。そして、どのような〈状況〉かと問いを立て明らかにしようとする〈認識主体〉も、「私」である。ここで「様子」を使うと、自分の目を通して自分を観察することになるが、自らを被写体にしつつファインダーをのぞくことはできないのである。そこで、特定の視点を取り払った「状況」「状態」が使われることになる⁶。

「様子」の「〈認識主体〉の視点込み」という性質は、しばしば「自分にはこう見えるが、その客観的妥当性には関知しない」という含みを生ずる。

(25) 今井のおばさんは、佐々木修一が町内の強盗事件の重要参考人になっていることを、まったく知らない様子だった。(官部みゆき「人質カノン」)

〈認識主体〉であるこの文の表現主体は、〈対象〉「今井のおばさん」が「まったく知らない」ことが事実であるという確証は持っていない。もしここで「状況」や「状態」を使うと、事実だという確証を握っていることになる。

次の2例の「様子」と「状況」をそれぞれ置き換えることは可能であるが、受ける印象が多少異なってくる。

(26)a. 天皇陛下は神戸市在住で将棋の元名人・谷川浩司棋聖に、阪神大震災時の様子を尋ねた。(毎日 99. 11. 18 朝)

b. 一方、国連関係者が、東ティモールにあるオーストラリア領事館に現地の状況を聞いたところによると、中心都市ディリでは15日も、散発的な発砲が続いている。(毎日 99. 9. 16 朝)

(26a)で「状況」を使うと、あたかも被害の程度を把握しようとする職務上の要請から尋ねたという感じがしてくるが、実際には歓談の場で一市民の震災体験に

⁵ (21)は「様子であった」なら言えるが、「である」で終わる文は存在文でなく①である。

⁶ 先に示した(19)に「私の様子」とあるが、これは〈認識主体〉である三人称動作主にと、って「私」は観察可能な〈対象〉だからである。

耳を傾けようとしているだけにすぎない。このような場合は「様子」の方がふさわしい。一方、(26b)の「状況」を「様子」にすると、「国連関係者」の担っている職責がより軽いものを感じられる。もし現地からの報告にもとづいて何らかの政策的判断を下すのだとしたら、「状況」を把握すべきであり、「様子」では心もとない気がする。

2.3 共通点

以上で「状況」「状態」「様子」の基本的な相違点は押さえたことになるが、ではこれらの共通点とは何だろうか。それは、「〈対象〉に生じている一連の変化の、時間軸上の一部分」を表す点にあると考えられる。

科学法則や一般的概念のような不変の存在について、その「状況」「状態」「様子」が云々されることは、ありえない（「三平方の定理の状態」など）。つまり、状況名詞の〈対象〉は変化しうる存在でなければならないのだが、その一方で〈対象〉自体の同一性も保証されている必要がある。別の言い方をすれば、〈対象〉は変化を収容しうる存在でなければならない。同一性を維持した〈対象〉の、その内外が絶えず変化しているがゆえに、〈対象〉がある時点ではどうなっているかが関心の的となり、言及の対象となるのである。

これまで挙げた例は特定の「時点」において静止画的に切り取る場合が多かったが、次のように一定の時間幅を持たせて切り取ることもできる。

- (27) メダカは卵膜が透明なので、受精してからふ化までの様子が観察できます。(毎日 95.12.18 朝)
- (28) 同雀は「定期給与が下げ止まるかどうかは、今後の状況をみないと判断できない」と話している。(毎日 99.8.31 夕)

絶えず移り変わる〈対象〉を、時間軸上の任意の位置において切り取って示す、というのが、状況名詞の機能である。どのようにして切り取るか——〈対象〉をとりまく外的関係（「状況」）か、内的な質（「状態」）か、特定の〈認識主体〉の視点からの把握（「様子」）か——によって、3つの名詞は使い分けられる。

ただし、「変化の時間軸上の一部分を切り取る」という表現機能は、実は文を述べるという行為自体が有するものでもある。冒頭の例(1)を再掲するが、「状況」のない後者の文も、「私」に生じている一連の変化を、ある時点において取り出したものと言ってよい。

- (29)a. 私は寂しいなんて言ってもらえない状況だった。
b. 私は寂しいなんて言ってもらえなかった。

状況名詞は、文を述べることも自体も持つ「変化の時間軸上の一部分を切り取る」という機能を明示化する形式といえるが、このことが状況名詞の機能を明確に捉えがたくしている面もある。しかし、上の2つの文がまったく同じように使われるわけではない。「状況」をつけた前者の方がより分析的・客観的に語っていると

いう印象を与える。つまり、「状況・状態」は事態をより客観的な図式として提示するという表現効果、「様子」は「自分にはこう見える」という留保をつけるという表現効果を求めて用いられていると考えられる。

3. 状況名詞のパリエーション

本節では、「状況」「状態」「様子」と同様に「変化の時間軸上の一部分」を表すのに使える名詞の整理を行う。その概要を表2に示す⁷。「様子」に代表される主観的・感覚的な類（a～f）と、「状況」「状態」に代表される客観的・分析的な類（g～k）に大別できる。

表2：状況名詞の下位類

「時間軸上の一部分」の切り取り方	語例
a 〈認識主体〉の「反応」	感じ, 印象, 感触, 手応え
b 〈認識主体〉の「見た目」	様子, 様相, 模様, 雲行き
c 焦点のない「見た目」	眺め, 光景, 情景, シーン
d 〈対象〉から発散されるもの	雰囲気, ムード, 空気, 風, 機運
e 〈対象〉の「外面」	表情, 形相, 格好, 身なり, いでたち 構え, 姿勢, 態勢, 態度, そぶり, 旗色
f より客観的な「見た目」	さま, ありさま, ありよう, ざま, 体 ^い , 体たらく
g 〈対象〉自体の内的質	状態, 具合, 調子, コンディション, 容態, 様態
h 〈対象〉をめぐる外的関係	状況, 情勢, 形勢, 局面, 境遇, 事情, 情状
i 任意の時間幅で切り取られた変化	いきさつ, 顛末, 経緯, 次第, 消息 行く末, なりゆき 経過, 推移, 流れ, 展開
j 変化の方向性	動向, 動静, 動き, 趨勢, 趨向, 傾向, 風向き
k 不連続に区切られた変化	段階, 過程, 次元, レベル, ステージ, フェーズ
l 変化が生じている場・事態	場, 場面 事態 場合, ケース, 時, 時点

《a～f類》

特定の〈認識主体〉に把握されることを前提とするもので、b・c・e・f類

⁷本節の主旨は、網羅的な語彙表を示すことではなく、すべての状況名詞をもれなく収められるような下位類の枠を示すことにある。複数の下位類にまたがって存在すると考えるべき名詞もあるが、便宜的に1つの下位類におさめた。また、「戦況（＝戦争の状況）」「実態（＝実際の状態）」のように限定要素を造語成分に含む名詞は掲げていない。なお、同一の類として列挙した名詞間の差異の記述は、紙幅の都合から割愛する。

は主として視覚(～を見る・～が見える), a・d類はその他の感覚(～を感じる・～がする)で捉えられる。

a類は〈対象〉を知覚した〈認識主体〉の心身に発生した反応である。(31)のように〈認識主体〉を動作主にした所有構文が可能である点でb類以下と異なる。

(30) 知らない人がほとんどだけど、オフィスの感じは、以前のままだね。

(眉村卓「辞めた会社」)

(31) 大叔母に、わたしは、母や姉や祖母と少しちがう感じを持っていた。

(皆川博子「心臓売り」)

b類は2.2でみた「様子」に代表されるもので、〈認識主体〉の目に映った限りでの〈対象〉のあり方である。a・b類の名詞を文末につけると、「～ようだ」に似た婉曲表現となる。

(32) 脇田の顔は、立っているときとこんなふうの下を向いているときでは様相が違う。(高樹のぶ子「青北風」)

(33) 経営者も職人も高齢で、震災を契機に廃業する業者が相次ぎそうな雲行きだ。(毎日 95.1.31 朝)

c類は特定の〈認識主体〉が視野に捉えた映像を表す点でb類と似ているが、(34)は「様子」に置き換えられない。(34)の〈認識主体〉である書き手は、あらかじめ特定の〈対象〉を念頭に置いていたわけではなく、偶然目に入ったものに言及している。つまり、焦点となる〈対象〉の存在を前提としていない。(35)のように、結果的に〈対象〉らしきもの(“時間”や“場所”の場合が多い)が読みとれる場合に「様子」と重なるのである。

(34) そういう雑誌に敏感になっていた先日、電車の中で信じられない光景に出合ったのです。(毎日 99.2.17 朝)

(35) 就職試験で面接を受けたときの光景が、頭の片隅をよぎる。(毎日 99.8.9 夕)

d類は〈対象〉を動作主とする所有構文(36)が可能なので、〈認識主体〉でなく〈対象〉の側に属すると考えられるが、〈対象〉の一部分をなしているというよりも、〈対象〉から周囲に向けて発散され、その場を充滿するという性質のものである。「～が漂う・満ちる」など、気体や液体に擬されて表現される例が目立つ。

(36) 選手たちが口をそろえて「負ける気がしない」と語る不思議なムードを持っていた。(毎日 99.8.22 朝)

(37) 片桐が事務室から店にもどった時、店の雰囲気がどことなくおかしいことに気づいた。(折原一「真夏の誘拐者」)

e類は「身なりを整える」「姿勢を崩す」のように〈対象〉自身による操作が可能なので、〈対象〉の一部分であると考えられる。この場合の〈対象〉は有情者に限られるが、(39)のような比喩的な用法もある。

(38) 交渉の見通しについて同社は「悲観も楽観もできない」と慎重な構

えだった。(毎日 95.9.13 夕)

- (39) 長い鎖国体制の扉を開いたミャンマーはどう変わろうとしているのか、現地の表情を追った。(毎日 95.7.22 朝)

f 類は一見すると b 類に含めるべきものに感じられるが、文末に置かれても婉曲表現にはならず(マイナス評価の程度強調といった意味合いを帯びる)、しかも(41)のように表現主体(=〈認識主体〉)自身が〈対象〉になれる点で、客観的な「状況・状態」に一歩近づいているといえる。

- (40) 第二次世界大戦中、学徒出陣で戦場に行った大学生の視点を通して、戦争のありさまを描いた映画だ。(毎日 95.5.31 朝)
- (41) 男の料理教室に通い始めたころのことです。私が豆腐をまな板にのせて切ろうとしていたら、先生が「まあ、豆腐は手のひらにのせて切るものよ」と言われました。言われてみれば母が、そして妻が手のひらに豆腐をのせて切っているのを私は何十年も見てきました。それにもかかわらず、このありさまです。(毎日 99.2.28 朝)

《g～l 類》

〈対象〉の「変化の時間軸上の一部分」を客観的・分析的に捉えようとする時、アプローチ可能な「変化」のあり方は「内的な質」か「外的関係」のどちらかである。2.1 でみたように、「状態」に代表される g 類が前者、「状況」に代表される h 類が後者と、別系列の語彙が用意されている。これらは、〈対象〉の変化を特定の時点において静的に切り取る用法が中心である。

i 類は一連の変化を時間幅をもたせて切り取る場合の専用の名詞である。「いきさつ」のようにある時点から過去へ遡るもの、「なりゆき」のように未来へ進むもの、「推移」「展開」のようにどちらにも使えるものがある。

- (42) 私は岩見刑事の質問に答え、簡単に発見までの経緯を伝えていった。(真保裕一「私に向かない職業」)
- (43) ただちに日銀の短期政策が長期的な金利政策に及んでいくかは、今後の推移を見ていかなければならない(毎日 99.2.15 夕)

j 類は「どのような方向に変化しているか」という観点からの把握である。一定の時間幅にわたる観察から抽出されるという点では先の i 類と共通する。

- (44) ただ、このところの諸研究の動向を見ると、第三の、ハミルトンらのもののがかなり有力になってきている。(竹内久美子「ダーウィンを悩ませたクジャク」)
- (45) 日本経済が強い競争力、高い成長、低いインフレを維持すれば、長期的な円相場のすう勢が円高になることは当然である。(行天豊雄「円安は歓迎すべきか否か」)

k 類は一連の変化を不連続に区切った部分を表す。場所(～に入る・さしかかる)や時間(～を迎える)に擬されることが多い。

- (46) メーカー側はデータ放送の規格を統一さえすれば、デジタルテレビを製作できる段階にある。(毎日 99.3.16 朝)

I 類は変化が発生している“場”や“事態”を直接的に指すことによって「時間軸上の一部分」を表すものである。(47)は空間，(48)は現実の事態，(49)は仮想の事態を指している。この場合，〈対象〉と〈状況〉が渾然一体となっているといえる。

- (47) 「天誅」という、まと外れの言葉を吐いて、その場を取り繕ろおうとしていた。(篠田節子「野犬狩り」)
- (48) だって当の本人が一番事態を把握していなかったのだから。(奥宮和典「おじいさんの内緒」)
- (49) いま北京が主張している「武力行使の選択肢を放棄しない」こと的前提は、台湾が独立を明確に宣言するか、外国勢力が軍事介入するという二つの(現実ではない)ケースに限定している。(朱建栄「対中台関係の正しいあり方は」『日本の論点'97』)

4. おわりに

「状況」「状態」「様子」に代表される状況名詞は、「〈対象〉に生じている変化の、時間軸上の一部分」を切り取るという機能を持つ。そして、その切り取り方によってさまざまな名詞が使い分けられることをみた。

状況名詞は文末に付加されることが多く、「～状況だ」「～模様だ」「～構えだ」などが、報道文を中心に頻用されている。この種の文末表現の意味・機能について、本稿で明らかにした個々の名詞の性質をもとに、より踏み込んだ分析を進めることも必要であろう。

さらに、状況名詞の周辺に位置し、表2に掲げた名詞の一部と用法の重なりを有する名詞として、次のようなものもある。これらも視野に入れていきたい。

- ・〈対象〉に恒常的に付随するもの(変化することを前提としていない)
 - … 輪郭, 様式, 構造, 情緒, 風情
- ・〈対象〉と空間的・時間的に近接するもの(〈対象〉と分離して存在する)
 - … 環境, 兆候, 余韻

参考文献

池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社。

西山佑司(1990)「カキ料理は広島が本場だ」構文について一飽和名詞句と非飽和名詞句一」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22, 慶應義塾大学言語文化研究所。

森田良行(1984)『基礎日本語3』角川書店。

(みやた こうじ/日本語研究教育センター非常勤講師)